

日常場面における無表情の印象

Impression of neutral facial expression in daily situation

岡田梢、渡邊伸行

Kozue OKADA, Nobuyuki WATANABE

E-mail : n-watanabe@neptune.kanazawa-it.ac.jp

和文要旨

日常生活において、私たちは“怒り”を感じても顔に出すことは少なく、むしろ抑制して無表情を装うことがある。このことから、逆に無表情を見ると相手が“怒り”を抱いているように見えることがある。本研究は、コミュニケーション場面における“無表情”がもたらす印象を調べることを目的とした。刺激として、モデルが表情(怒り、笑顔、無表情)と3種類の姿勢を演技した場面を撮影した画像、24点を用いた。実験では、各刺激に対するSD法による印象評価を実施した。因子分析の結果、「評価性」「活動性」「誠実性」の3因子が抽出された。各因子を軸とする感情空間における各画像の布置を確認したところ、“無表情”は「不快」で「不活発」、そして「誠実」に見られることがわかった。また“無表情”と“怒り”の布置を比較した結果、両者は共に「不快」として判断されるが、“怒り”の方が“無表情”よりも「不快」の程度が相対的に高いことが示された。

キーワード：無表情、表情、コミュニケーション、印象、セマンティック・ディファレンシャル法

Keywords : neutral facial expression, facial expressions of emotion, communication, impression, semantic differential technique

1. 緒言

1.1. 日本人の表情の表示規則

私たちは様々な方法でコミュニケーションを行っており、表情もその一つである。感情などの心的状態が顔に表れることで、言葉にしなくてもそれを伝えることができる。しかし、表情によるコミュニケーションは、必ずしも自分の伝えたい感情が相手に伝わりとは限らない。伝えたい感情を表情にしても、相手は違う感情を読み取っていることもある。また、相手に自分の感情を偽るために、自分が感じた感情とは全く異なる表情を意図的に表出することもある。特に日本は「恥」の文化に基づいて、自分の感情をはっきり表さなかったり、偽装するなど日本独特の表示規則 (display rule) がある [1],[2]。世間体を強く気にする日本人にとって、集団の和を乱すような怒りの感情のコントロールはとても重要であり、そのため怒りの感情を偽装するために笑顔になったり、表情を

抑制して無表情を装うことで相手に読み取られないようにする。こうした「おもて」と「うら」の使い分けをすることは当たり前なこととしているため、表情を読み取る際にも日本人は「おもて」である表情などをそのまま読み取ることはいない傾向があることが指摘されている [2]。

1.2. 無表情について

基本的に、私たちは嬉しいと感じた時に“笑顔”を表出し、悲しみを感じた時に“悲しみ”の表情、怒りを感じた時には“怒り”の表情を表出するなど、基本6感情(喜び、驚き、恐れ、悲しみ、怒り、嫌悪) [1]-[3]に相当する表情を表出する。この基本6表情を対象とした研究は数多くなされているが、そういった研究の中で表情と併せて“無表情”という言葉や“無表情”を表す顔刺激が使われている。

無表情に焦点を当てた研究 [4] において、無表